

甲南大学 総合研究所報

甲南大学総合研究所

神戸市東灘区岡本8-9-1

電話(078)431-4341

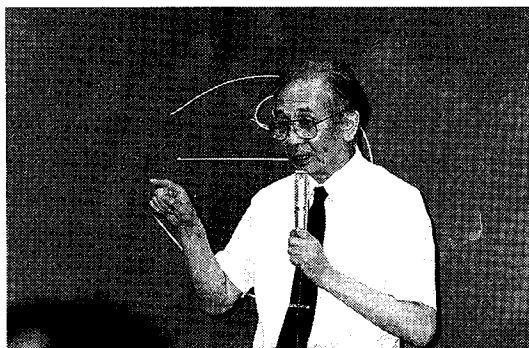
第5回公開講演会

新しいライフサイエンスを探る

—— 分子レベルで見た自然 ——

講師 コロンビア大学教授 中西香爾氏

総合研究所は、1987年5月22日午後3時から10号館2階1021号講義室で、中西香爾氏を招き、公開講演会を開いた。同氏は、旧制甲南高等学校第20回卒業生であり、東京教育大学、東北大学教授を経て、現在アメリカ合衆国コロンビア大学教授、およびアメリカ芸術科学学士院会員をされている。1979年に日本化学会賞、1980年にコロンビア大学よりH. C. ユーレイ賞、1986年にチューリッヒ大学よりP. カレル金賞などを受賞されている世界的に著名な化学者である。以下に、理学部宮沢敏文講師にまとめていただいた講演要旨を掲載する。



講演要旨

中西先生は、コロンビア大学に移られてから、今年で19年目を迎えられ、現在サントリー生物有機科学研究所長も兼務されている。微量で単離困難な生物活性物質の構造決定を次々に行ない、その作用機構を探究する一方で、そのための有力な手段である種々の機器分析法の応用開発をされてきた。近年の研究では、特に学際的分野に重点を置かれている。今回の講演では、今までに手懸けてこられた多数の研究の中から、幾つかの具体例を取り上げて、そのいささつを中心に、沢山のカラーズライドを用いて、分かり易く説明された。大半は、現在精力的に推進

されている研究に関連するもので、どういう目標を持って取り組んでいるか、また学際的研究において化学者として何ができるかを強調された。

取り上げられた主なテーマは、次の通りである。
(a) ギンコリド：東北大時代に、イチョウの苦味成分ギンコリドの構造決定をX線を用いずに行なったが、この途上で発見した核オーバーハウザー効果は、天然物の構造決定に広く利用されている。(b) エクジステロイド：昆虫および甲殻類の脱皮ホルモン(エクジソン)作用を有する化合物(エクジステロイド)が植物にも存在することを発見した。最近エクジステロイドレセプターに対して、480倍も親和力の強い類似化合物が合成でき、昆虫生理学者と協同してレセプターの単離に挑戦している。(c) カニの脱皮抑制ホルモン：大変な努力の末、エクジソンの生合成を行なうY-器官の培養法に基づくアクセイ系が確立でき、X-器官にある3-オキシキヌレンから由来するキサントレン酸が、エクジソンの生合成を阻害していることを明らかにした。(d) ウンカの細胞内共生微生物：ウンカの卵から分離した共生微生物の培養を系統的に行ない、その一つから、イネ白葉枯病菌に特異的な抗生物質アンドリミドを

単離するとともに、共生微生物がウンカにステロイドの素（エルゴステロール）を供給していることを明らかにした。(e) サメ忌避物質：ウシノシタの分泌するサメ忌避物質については、諸外国で長期に亘って研究されていたが、分離が困難で成功していなかった。最近ステロイド性のパボニンとペプチド性のパルダキシンを単離し、構造決定できた。(f) プレベトキシン：メキシコ湾の赤潮の原因となる渦鞭毛藻の生産する神経毒プレベトキシンBは、前例のない骨格を有し、極めて異常な経路で生合成されることを明らかにした。(g) クマノミとイソギンチャクの共生関係を誘起する物質：両生物の共生関係が化学物質（アンフィキューミン）で誘起されることを、動物行動学者との協同研究により証明した。(h) チュニクローム：ホヤの血液に含まれるバナジウムの取り込みに関係する色素（チュニクローム）の単離は、これが水、酸素に非常に不安定なため困難を極めたが、新しい抽出技術とクロマト操作を組み合わせて単離に成功し、構造を決定できた。(i) 視覚色素タンパク質：現在コロンビア大で主力を注いでいる。視物質（ロドプシン）および好塩菌のプロトン輸送色素（バクテリオロドプシン）は、レチナルを発色団とする色素タンパク質であるが、その三次構造は解明されていない。過去10年間に、70種以上のレチナル類似体を合成し、これからロドプシン類似体を再構成する手法を確立し、物理、生物物理、生化学の人々と協同して、この色素タンパク質の種々の様相を明らかにしてきた。また極最近には、差FT-IR法を用いて、バクテリオロドプシンにおけるプロトンの膜透過の機構に関する重要な知見を得た。

以上の研究例を通じて、今はインターディシプリン（学際）を越えて、いわばノンディシプリン（無



学際）の時代になっているということを強調された。自然科学が発展して行く過程で、数学、物理学、化学、生物学などの分野が生まれ、また化学は、有機、無機などに分かれた。しかし、自然はもともと一つなので、人為的に細分化の進んだ学問分野の間に大きなギャップが生じてしまった。最近になって、今までは全く手の着けられなかった領域を、学際的なテーマとして取り上げることが可能になってきた。例えば、複雑な有機分子の構造について、最も訓練を受けているのは有機化学者であるが、それが生体高分子とどのように相互作用するかとなると、生物物理の人などと協同して、新しい実験法を編み出しながら研究して行かねばならない。こんな所から、学問を異にする者同士の対話が必要になってくる。ところが、日本の学制は、協同研究をやり易いようなシステムになっていない。入学試験や講座制も含めて、学制を抜本的に変えて行かないと、もう一歩進んで、世界をリードするだけの強い影響力を持った学問の流れが、日本からはいつまでたっても出てこないことになろう、ということに言及されて講演を締めくくられた。

昭和61年度研究チームの報告

平生鈺三郎の総合的研究

研究チーム 三島 康雄（営） 高阪 薫（文）
 有村 兼彬（文） 安西 敏三（法）
 杉原 四郎（名誉教授）
 柴 孝夫（京都産業大学）

平生鈺三郎の総合的研究として、第2期平生研究が昨年度より始まった訳であるが、本年の最大の成果は、何といても『平生鈺三郎講演集—教育・社会・経済—』（編集・発行 甲南学園、制作・販売 株式会社斐閣出版サービス、定価 3500円）の上梓であろう。これまで平生のまとまった著作は、わずかにその言行録を集めた岩井尊人の編になる『私は斯

う思ふ。』(千倉書房、昭和11年)のみであった。むしろこれとて、文部大臣に就任した上での出版であり、必ずしも平生の人となりや思想なりを知る上では十分とはいえないものであった。わたくし達が、研究の副産物として編集した今回の図書は、それに比すればはるかに平生を知る上での貴重な参考資料となろう。教育、社会・文化、経済・経営、国際問題、欧文の五部構成で以て、平生の多様な活動を総合的に把握しようのである。日本近代史の資料としてはいうまでもなく、甲南を平生の眼からみて、どのように推移していったかを知る上でも、甲南の在り様を検討する上でも貴重な資料足りうること疑えない。

さらに、本書の出版を機会に、平生の人となりをより一層理解するために、総会研究所企画の座談会「人間・平生について」が本年6月24日にもたれた。平生家から三名、拾芳会より三名の出席をみ、生身の平生について語って頂いたのである。これは後に公にされるはずであるが、活字になっているものあるいは公に向かって行われた講演とは違った平生像の一面をわたくしたちは知りえよう。

研究会に関していえば、有村兼彬氏が「平生夙三郎と漢字廃止説」とのテーマで、発表された。それは次の如きものであった。1. 戦前における漢字制限、2. 岡崎常太郎「東京市ノ小学校ニオケル義務教育デオボエル漢字ノシラベ(『カメノヒカリ』昭和11年6月号)、3. アメリカ教育使節団の報告書(昭和20年11月)、4. 大正10年4月8日(日記)、5. カナモジカイとのつながり、6. 伊藤忠兵衛「ヨイコトハカナラズオコナワレル」(『カメノヒカリ』大正14年10月号)、7. 警察犯処罰令第二条第十号、大阪でコレラがはやっったときの掲示版、8. 兵庫共同委託会社のパンフレットより(日記、昭和3年11月1日)、9. 必要以上に難しい漢字(『平生夙三郎活字集』)、10. 日記、昭和17年2月21日、11. 加藤政之助の質問の要点、(秋田甲生編者『平生文部大臣の「漢字廃止の説」についての議会速記録とその論評』(カナエ社・昭和11年)、に。議会における質疑応答。これは平生の漢学論についての最初の研究といつてよいものである。

次に資料の公表に関してであるが、『甲南法学』第27巻、第3・4号において、平生夙三郎『自叙伝』(一)を掲載した。これは数回に渡って検注を施して連載する予定であるが、一読して頂ければわかるように、平生の主として『日記』を綴る以前の話と真

実が描かれており、そのおもしろさは小説以上でもあり十分に読む価値のあるものである。資料というより、史料的にみても幕末・維新期の子供の遊び、没落武家の生活様式、草創期の学校等々、様々な角度から読むことができ、貴重である。文学的にみても遜色がないと確信している。

第2期平生研究の進展の一部を紹介したわけであるが、共同研究者の一人である杉原四郎名誉教授が病気の為、一時継続困難と思われたが、その後健康を回復されつつあり、何らかの形で研究成果を公表できる予定である。その他の研究者も既に紹介した課題についてそれぞれ鋭意研究に努めている。

(安西)

ヴィクトリア朝文化の研究

研究チーム 松村 昌家(文) 村岡 健次(文)
高橋 哲雄(経) 田中 真晴(経)
中島 俊郎(文)

早いもので本研究会もワンラウンド2年目の半ばを迎えた。その間私たち研究仲間の仕事として、直接間接にヴィクトリア朝イギリスと関係のある数々の著書、翻訳書、論文、エッセイ等が刊行されたが、それらは当然研究会における私たちの関心の対象とならざるを得ない。今年度の例会(4月23日)は、まずF. A. ハイエク著、田中真晴、田中秀夫編訳『市場・知識・自由—自由主義の経済思想—』(ミネルヴァ書房、1986.11)の合評会から始まった。

本書がハイエクの経済哲学のエッセンスを伝えるのにふさわしい好著であることは、「朝日新聞」(1986.12.15)の書評にも述べられているとおりである。それだけに合評会には研究チームのメンバー以外の専門分野の方たちが大ぜい参加された。翻訳者の懇切丁寧な解説により、また活発な質疑応答を通して、私の如き全くの門外漢でも、ハイエクの思想の一端を学びとることができたのは幸いであった。また経済哲学が意外なところで文学と関連し合っていることが発見できたのも、このような学際的研究会であればこそ、とあらためてその意義を実感したしだいである。

5月11日から私たちの研究チームの企画による春季甲南大学公開講座が開かれた。題して「イギリス文化—昨日と今日」。例によって前後8回にわたる講座であったが、ヴァラエティに富む話題を掲げ、

充実した内容によって好評を得ることができたのは、私たちの要請を快く聞き入れて講師陣に加わっていただいた経済学部の熊沢誠、吉沢英成両教授に負うところが多い。この場を借りて感謝の意を表する。一つ誠に残念であったのは、第6回目の講師になってくださるはずであった杉原四郎前学長が、開講を前にして病でご入院のやむなきに至り、代役を立てねばならなかったことだ。ついでながら、杉原先生は研究会発足のときから欠かさず熱心に例会に参加され、6月例会にはマコーレイについての発表をなされる予定であったが、上述の事情で実現するに至らなかった。幸いに先生は最近『読書颯々』（未来社）というエッセイ集を出され、病状も次第に快方に向かっていると聞く。一日も早く全快の日を得て、また私たちの研究会に加わってくださることを希ってやまない。

5月に松村訳の『19世紀イギリスの小説と社会事情』（英宝社）が刊行され、7月1日に開かれた例会は、この合評会に当てられた。これは、ハーヴァード大学で教えるJ. P. ブラウン女史がアメリカの学生のために、彼らになじみの薄いイギリスの諸制度を解説したものだが、内容的に当然歴史や経済と関係が深い。ヴィクトリア朝イギリスの階級、宗教、教育、職業等々に関して、われわれとしても教えられることの多い本だが、この合評会で、殊に19世紀イギリスの小説を理解するには、（当然のことながら）ただ小説ひとすじではいかなことを、あらためて痛感させられた。やはり、他の分野の研究者たちとの交流が、基本的に必要である。少なくとも私個人としては、いまだかつて経験したことのない、このような交流の場を「ヴィクトリア朝文化の研究」会に求め得たことに、大きな喜びを感じているのである。

夏季休暇のあと、9月17日に松村が「ヴィクトリア朝のガヴァネスについて」と題する研究発表を行った。ガヴァネス（女家庭教師）とは、ヴィクトリア朝において、身分あり教養ある女性の就き得た唯一の職業。その地位そのものが極めて曖昧で不安定であったが故に、これにはさまざまな個人的・家庭的・社会的問題が絡み、かつ心理的、精神的抑圧や反発が小説家たちの注目をひいた。サッカレーの『虚栄の市』、C. ブロンテの『ジェイン・エア』はもちろんのこと、ギヤスケル夫人の『妻たちと娘たち』、ウィルキー・コリンズの『名なし』などは、その意味で見逃すことのできない作品である。また

当時のいわゆる「ナラティブ・ペインティングズ」（物語絵画）、『パンチ』なども重要な参考資料になる。

松村の発表では、その序説的な部分が紹介されたが、これまた歴史や経済とも大いに関係の深い問題なのである。しかも本格的な研究は未だ遠し、というのが実情である。われわれのチームとして、この面でも一つの成果をあげたいところである。

本年4月から、わが研究会にはもうひとり頼もしい仲間が加わった。文学部の渡邊孔二である。渡邊はスウィフトの専門家であるが、ヴィクトリア朝研究にも甚だ関心が深い。次回10月28日には、「絵入り週刊新聞—『ザ・グラフィック』の場合」の話をするのがすでに決っている。

一方私たちの研究会は、名著普及会から出ているBook Worldの編集者の注目するところとなった。同誌5月号、6月号、7月号、8月号に、それぞれ松村、村岡、田中、高橋がそれぞれ稿を寄せている。高橋はまた、『EQ』（光文社）に、向う2年間の予定で本年5月号から「ミステリーの社会学」を連載中、村岡は『ジェントルマン・その周辺とイギリス近代』（ミネルヴァ書房、1987.7）の編者の一人として、『アスレティズム』とジェントルマン』の一章を執筆した。そして来年3月までには松村編『ヴィクトリア朝小説のヒロインたち』（創元社）が刊行されるはずだが、これには中島が執筆者の一人としてハーディの『帰郷』に関する一章を担当している。

今年はヴィクトリア女王即位の年から数えて150年目、日本国内においてもこの時代に対して一段と深い関心が向けられるようになった。とりわけ明治時代とヴィクトリア朝イギリスとの関係は深い。私たちはさらに研究会を継続して、この分野にも鋤を入れることを望んでいるところである。（松村）

視覚認識機構の共通性を探る

—昆虫から人まで—

研究チーム 加地早苗(理・生) 上水流伸子(体)
藤原儀直(理・生) 道之前允直(理・生)
中島英治(大阪府大総合・生命)

—見える—

光感覚や視覚というと我々はただちに「眼」という光受容器を思いうかべるが、「眼」という組織の

みで視覚は生じてこない。眼で受けとめられた光情報が神経を介して脳に入り、情報処理を受けてはじめて“見えた”という感覚が生じる。

ヌタウナギは尾部の表皮部分で光を感じ、ナマコは肛門の周囲にある特別な細胞で光を感じる。また、鳥は頭の中にある松果体（脳組織の一部）で赤い光を受け取る。いずれの場合も“眼”以外の組織が光情報を受け取り、神経系を経て脳に伝えられる。そして、各種処理が加えられて“見えた”という感覚が生じる。その証拠に、尾部を照明されたヌタウナギは驚いて逃げだし、ナマコは肛門で夜の訪れを知り、砂底より這いでくる。これらの動物における表皮細胞や肛門周辺の細胞は“眼”と同じ働き、すなわち、光情報を受け取るという点で等しい機能をもつといえる。最近のハイテク機器でいう光センサーとデータ処理コンピューターにあたり、眼や肛門の細胞は光センサーであり、脳組織はコンピューターに相当する。

光刺激と動物の反応を調べる上で“見えた”という感覚が生体内に生じたか否かを知るのは大変重要なことであり、また大変困難な問題でもある。生理学者はこの点を非常にスマートに解決してしまう。眼の細胞内に毛より細いガラス管でできた電極を挿入し、光刺激による細胞内の生理的变化を電気信号にかえて計測し、光に対する眼の反応をとらえる。しかし、この方法では光を受けて細胞が興奮する光感覚を知ることができても、“光が見えた”という視覚をとらえることは困難である。我々はこのような難題に直面したとき“見えたかどうか相手に聞いてみたら”と冗談半分（半ば本心で）に言うことがある。しかし、言葉という表現法を持っているヒトを実験対称としていても嘘をついたり、適当な回答をし、なかなか真の回答を得るのはむづかしい。まして、言葉をもたない動物達を相手に、いかにしてその本心を聞きだすか、これはまさしく至難の技であり、神眼や神耳が必要になってくる。

—ハエに聞いてみる—

昆虫の代表であるハエはどのような色の光を見分けることができるか？

これは、視覚認識の共通性をさぐる出発点として、どうしても解決しておかなければならない問題である。我々はこの問題を解決するにあたり、あえて“ハエに直接聞いてみる”という方法を選んだ。それには人の操る言葉にかえて行動で示すボディーランゲジで対話するのが一番である。このため、同言語を

解する pyokori 系統のハエを対話相手に選んだ。pyokori は光源の点滅刺激を受けると脚を急激に伸縮する。この筋運動（ハエの意志に関係なく動く）により、床面のハエはピョコリと跳び上り、天井や壁面のハエは床にころげ落ちる。つまり、光源の色と明暗を判断してその刺激に反応し、見えたか否かを行動で回答していることになる。次いで、ハエに質問をすることになるが、その質問を理解してもらうため、ちょっとした工夫が必要である。

どのような色が見分けられるかと質問するため、高さ1 m、横巾10 mの人工虹を暗室内に作り（基礎生物学研究所の世界最大のスペクトログラフ装置ではじめて作成できる）、これを pyokori にみせる。人工虹の各色（赤から紫と紫外部まで）ごとに透明ビンに入れたハエを置き、光源を点滅させると特定の色の所でハエがピョコリと跳びあがる。すなわち“この色は見えている”とボディーランゲジで回答していることになる。

このピョコリ法で調べてみると、365 nm（ヒトにはごく薄い青色に見える紫外線）の光が最も強く見え、次いで、560 nm 前後の緑～黄色が弱く見ることがわかった。このほか光に対する行動として、走光性という反応行動がある。これには、光源に向かって近よってゆく反応と、逆に光源から遠ざかろうとする反応がある。光が見えておれば上記二者のいずれかの反応を示し、見えていないときは無方向に動きまわるか、その場に留まっている。このボディーランゲジを用いて前記と同じ質問をしてみると、まったく異なった回答が得られた。人工の虹をハエに見せ、どのような走光行動をとるか調べたところ、ほとんどの可視光（ヒトの見える光）に対しては近づこうとし、700 nm（赤外線に近い赤色）の赤色光では遠ざかろうとすることがわかった。これらの結果、ハエは可視光全域を見ることができ、その中でも緑色にたいして高い感度をもっている。その上、紫外部の365 nm に非常に高い光感度をもち、さらに、700 nm の赤外線に近い赤色をも弁別できることがわかった。しかし、365 nm という紫外線をどのような色として感じているのかまったくわからない。さしずめ、紫外線色とでも表現するしかない色を見ているのであろう。

今後、このようなボディーランゲジによる対話法を他の動物について応用してゆけば種々な対話を通してこれまで難解とされてきた問題点が解決されるものと期待される。しかし、ボディーランゲジを用

いて動物達と対話するには、日本人が外国語を習得するより以上の技術的困難さや文法上の複雑さ、語意の少なさなどが大きな障害となっており、これらを解決すればいろいろな動物達と対話ができるようになると思う。(道之前)

注) 跳び上り行動をするハエは本研究チームの中嶋英治によって発見され、ピョコリと跳び上る行動から pyokori と命名され、世界共通のハエ戸籍簿に登録されている。

戦後日本の経済文化

研究チーム 小松 陽一(営) 藤本 建夫(経)
杉村 芳美(経) 鶴身 潔(営)
吉沢英成(経)

本研究チームは、今年度からスタートした「戦後日本の社会文化」とも合同研究会を重ねながら、戦後史理解のための視角を模索してきた。しかし明確な戦後史像はまだ結ばれてはいない。また、それに関する、紹介に値する面白いエピソードも思い浮かばない。現時点ではまだ、各メンバーのおおよその関心方向を簡単に報告するにとどめざるを得ない。「生活文化考」(杉村)

このパートでは、高度大衆化の先端を行く戦後日本社会の「生活」の変質とその意味について、研究をつづけている。「生活文化」という言葉は、この共同研究が発足する際に、さしあたり生活およびその周辺の領域を対象とするうえで用いることにした概念である。しかし、研究の過程で得た実感は、戦後日本の社会に「生活文化」と真に呼べるような実体があったのかどうか、かりに存在したとしても、今日においてはほとんどその実質が失われているのではないか、ということである。「生活文化」のほんらいの座は、家庭およびコミュニティーということになるのだろうが、現実にはそれらは「ビジネス文化」「企業文化」に席卷、蹂躪されてしまっている。長時間労働はもはや、生活のためというよりも、会社のためにおこなわれているといった方がよい。他方、生活の中味は、映像やコトバでビジネスが送り込んでくるライフ・イメージの媒体としての財・サービスの購入、消費の活動がほとんどを占めているといえる。それはたいして驚くべきことではないのかも知れない。経済企画庁が毎年提出している『国民生活白書』なるものを見ても、そこでとりあげら

れているのは、まず「消費の実態」であり、その他についても、モノやサービスの購入をつうじての「生活」にすぎない。労働時間の短縮が内需拡大との関連で語られるような社会の「生活文化」とは一体何なのだろうか。

「教育文化考」(藤本)

現在、社会の最も関心を引くテーマのひとつに教育問題がある。この問題はもちろん非常に多様な側面を持っているのだが、「学習塾」からそれに迫ってみる、これが本研究チームでの私のテーマである。

戦後、一方で教育が民主化され、また所得水準が上昇したこともあって、建前では誰でもが大学に、しかも一流大学に進学可能となった。他方で大学も軒並総合大学化したため、各大学の特性や伝統がかえって失われ、その結果、当然の如くにして大学間に縦の序列化が進んだ。こうなると誰もがより上位の大学を目指すようになり、受験競争もいよいよ激しさを増した。有名校への進学が教育の主目標であるとの暗黙のコンセンサスの下で、競争を少しでも有利に闘い抜くための私的機関として学習塾の評価が高まってくれば、それにつられて本来の公的教育機関たる学校までも擬似学習塾化を余儀なくされたかのようである。そうなった学校にそっぽを向き、時折不満を爆発させる分子たちを抑えつけるには、パリサイ的な厳格な校則で彼らを縛る他ないのかもしれない。

ここで進学塾自体の是非を論じても大して意味はない。私にとって関心のあるのは、私的機関の社会的機能である。現代の学習塾との比較の意味で、生活と密接に結びついていた寺小屋教育の意義を再検討する必要性を今感じている。幕末期土佐藩のある山村で使用されていた寺小屋教科書のコピーが手元にある。それを手がかりに、上記の問題を検討するのがさしあたっての仕事である。

それにしても、明治になって庶民教育が寺小屋から「お上」の手に集中化され、そして戦後の民主化教育のなかから公教育機関の擬似学習塾化が進んで行ったとは、何たる歴史の皮肉であろうか。

「企業文化考」(小松)

企業文化 (corporate culture) あるいは、より一般的に、組織文化 (organizational culture) の研究は、この4、5年来、急速に盛り上がってきた。例えば、管理論、組織論の分野で米国の代表的なジャーナルの一つ、*Administrative Science Quarterly* (ASQ) は、1983年に、組織文化の特集号を出して

いるが、わが国においては、それより一足早く、1982年に、組織学会の機関誌『組織科学』が、コーポレート・カルチャーの特集号を組んでいる。

企業文化の研究は、従来、経営理念論、あるいは、組織風土論として、どちらかといえば、地味な研究が積み重ねられてきた領域である。それが、ここに来て、にわかには活発な研究の対象になった遠因は、E. H. Schein も示唆するように、欧米とはかなりスタイルを異にする日本の経営の有効性が、1981年に相次いで出版された。W. Ouchi や、T. Pascale と A. G. Athos の著作によって、国際的に評価され始めたことにあるといえよう。経営管理のスタイルに唯一最善の方法はないとは、1960年代後半から1970年代にかけて、管理論、組織論で一世を風靡した条件適合理論（contingency theory）の基本命題の一つである。しかし、1980年代にはいると、環境決定論的色彩が濃厚なこの理論に代わって、より主体決定論的な、いわば新条件適合理論（neo-contingency theory）とでも名付けられる一連の研究が登場する。その代表的な成果は、米国において、R. E. Miles と C. C. Snow、あるいは、H. Mintzberg の仕事、わが国において、野中郁二郎や加護野忠男の仕事であるが、上記の W. Ouchi 等の研究もその一環であったと考えられる。そこにおいては、組織の有効性は、組織の内部特性と外部環境特性の適合よりも、各種特性の間に見いだされる相関性、一貫したパターン、あるいは、「ゲシタルト」によって、よりよく説明されると主張される。かくて、こういった特性間の一貫したパターンをもたらず組織的要因の有力な候補としての企業文化、組織文化、さらには、それらを創造、普及、変革する経営者、管理者のシンボリックな言動が脚光を浴びたのは、有名な T. E. Deal と A. A. Kennedy の仕事、Corporate Culture（翻訳書のタイトルは『シンボリック・マネージャー』）が、たとえ出版されなかったとしても、極めて自然の成行きであったと言える。

このように企業文化は、古くて新しい研究テーマであるが、同時に、未開拓な領域がまだまだ多い研究分野でもある。とりわけ、企業文化の概念の操作化や測定の問題と、企業文化変容プロセスの分析枠組みの構築と実証の問題は、筆者にとって最も興味をそそられる研究課題である。

「ローン文化考」(鶴身)

わが国の高度経済成長期における、輸出・設備投資主導型と規制色の強い金融の枠組みは、各経済主

体の金融的行動という観点からみると、間接金融の優位、オーバーボロイング、オーバーローン、資金偏在、という金融構造の現象面での特色となって現れていた。ところが、昭和48年の第1次石油危機という歴史的な契機として、わが国経済は低成長と国際化を現実のものとして甘受せざるを得なくなった。その結果、大きく影響を受けた金融的側面においても、金融構造安定化のため金融諸規制や金融システムのあり方に対する見直しが進んできた。資金循環構造の変化、国債の大量発行、経済主体の金利選好意識の高揚等とあわせて、資金不足部門のシフトに伴うオーバーボロイングの後退と、間接金融の変容、銀行部門内部の取引構造に関するオーバーローンと資金偏在の変質という現象的特色をみるに至った。さらにその後の環境変化の中で、わが国金融の枠組みがいかなる変容を迫られつつあるか、また金融システムの変革がもたらしたその経済的意識について考察・検討を加えたい。

「貨幣と民主主義」(吉沢)

“衣食足りて礼節を知る”(管子)は日本のここ2、30年の経験で無惨にも破られたが、同じ中国の孟子の言“恒産なければ恒心なし”も違った意味で不成立ということになった。つまり、恒産というものが存在しなくなったのである。イギリスの諺にもまったく同じ主旨の“A real property, a real purpose.”がある。これを日本語にすれば、“不動産は不動心”とでもしたいところだが、いまや不動産はけっして恒産ではなく、投資の対象となり、人の手から手へ転々とする。不動心など生まないのである。むしろ“不動産は浮動心”というべきだとは当プロジェクトのある参加者の言。“恒産なければ恒心なし”とみられていた往時は、所有には、使用・処分自由の権利とともに義務を伴っていたのだが、いまや所有は権利ばかりになってしまった。義務のない恒産の所有は、まともにそれが利用される場合でも、利を得るように使用される(資本として)か、売却益を手に入れるために売られるのである。まさに“不動産は浮動心”である。こんななかでの民主主義は、cash nexusによって辛うじて接着された民主主義である。民主主義を多数決とするなら、そこには善人の数が悪人の数より多いという大前提が必要になるが、cash nexusのもとでは、善悪など問題でなく、なにしろ銭人が過半数を占めること必定。こんなのを民主主義というべきなのだろうか。戦後民主主義もこうした点から再検討すべきであろう。

昭和62年度研究チーム

アメリカにおける子ども—その文化的・社会的意味—	谷本 泰三 (文) 他5名。
イメージと文化に関する研究	藤岡 喜愛 (文) 他24名。
海浜社会の伝統と変容 — 志摩半島・海女集落のエスノグラフィ —	森田 三郎 (文) 他7名。
戦後日本の社会文化	斧谷彌守一 (文) 他5名。
不確実性下の意志決定モデル—その経済・経営への応用—	下条 哲司 (理) 他6名。

以上、5チームの研究中間報告は所報第7号(来年3月発刊予定)に掲載する。

お知らせ

◎第6回総合研究所公開講演会

「アメリカの日本料理ブーム
—その文化人類学的考察—」

国立民族学博物館教授 石毛直道氏

昭和62年11月13日(金)午後3時から10号館1階1011教室

講師紹介

1937年、千葉県に生まれる。1963年、京都大学文学部史学科卒業。京都大学人文科学研究所助手、甲南大学文学部助教授を経て、現在、国立民族学博物館教授。農学博士。タンザニヤ、リビア、トンガ王国、西イリアン、ハルマヘラ島などで、調査・研究に従事。著書には、『リビア砂漠探検記』(講談社、1972)、『環境と文化—人類学的考察』(日本放送出版協会、1978)、『論集 東アジアの食事文化』(平凡社、1985)など多数。1972年に第7回渋沢賞(日本民族学振興会)、そして1983年に日本生活学会研究奨励賞を受賞。

◎第7回総合研究所公開講演会(予定)

京都大学法学部教授 高坂正堯氏

昭和63年5月20日(金)午後3時から

◎研究所叢書の発行

叢書7「18世紀ヨーロッパの社会と思想」 S. 62.9 発行

本書入手ご希望の方は、総合研究所にお申し出下さい。

◎研究員の変更

「アメリカにおける子ども」チームに、池田啓子氏(甲南イリノイセンター所長)が、新たに参加されます。なお、同氏の研究課題は「アメリカにおける高校生の自画像」です。